目　次

第一章　創造と堕落 …… 1
第二章　神のジレンマおよび受肉におけるその解決（前編） …… 9
第三章　神のジレンマおよび受肉におけるその解決（後編） …… 16
第四章　キリストの死 …… 28
第五章　復活 …… 38
第六章　ユダヤ人の拒絶 …… 48
第七章　異邦人の拒絶（前編） …… 61
第八章　異邦人の拒絶（後編） …… 70
第九章　結論 …… 83

On the Incarnation of the Word of God

By Saint Athanasius

これは　C.S.M.V.（1944）による英語訳からの重訳である。聖書の引用は新改訳第三版による。翻訳者は藤遥（ふじ・はるか）。
出　典　は　https://github.com/christian-classics-jp/incarnationより。

アタナシウスについて

イエス・キリストの教えは使徒たちに引き継がれ、使徒たちはそれをさらに「監督」、「長老」、「牧師・教師」と呼ばれる人々に引き継ぎました（エペソ 4:11 、第二テモテ 2:2 ）。

福音は各地に伝えられ、ローマ帝国内のいたるところに教会が生まれましたが、生まれたばかりの教会はたちまち迫害に直面しました。イグナティオス、ポリュカルポス、ユスティノスら「教父」と呼ばれた人々が殉教していきました（ 1 ～ 2 世紀）。

その後、イレナエウスやテルトゥリアヌス、アレクサンドリアのオリゲネス、カルタゴのキプリアヌスなどの神学者たちが起こり、迫害への弁明や異端への反論に活躍しました（ 3 世紀）。

アタナシウスは 295 年頃生まれ、コンスタンティヌス帝による「ミラノ寛容令」（ 313 年）が発布されたときはまだ 18 歳くらいでした。アタナシウスが『神のことばの受肉』を書いたのは 318 年頃、彼が 23 歳のころと思われます。

この後、「アリウス論争」が起こり、コンスタンティヌス帝は教会の一致を図るため、ニカイアに会議を招集しました。アリウス派は否定され、「ニカイア信条」が採択されました（ 325 年）。しかし、アリウス派は、アリウス主義を論駁し、アレキサンドリアの司教となったアタナシウスに、政治的な力を使って罪を着せ、流刑にしました（ 336 年）。アタナシウスの無罪が証明され、彼は 346 年にアレキサンドリア戻り、司教に復帰しましたが、その後、アリウス派によって何度も流刑に遭っています。しかし、彼は決してアリウス派と妥協することなく、真理のために戦いました。アタナシウスが没したのは 373 年、アレキサンドリアにおいてでした。

5 世紀ころに作られ、三位一体を明確に告白している信条は、その信仰を守り通したアタナシウスの名を冠して「アタナシウス信条」と呼ばれるようになりました。アタナシウスの信仰は、今に至るまで引き継がれています。

第一章　創造と堕落

第一節

前の本（『異教徒反駁』）で私たちは、異教の偶像礼拝と偽りの恐れがどのような起源から生じたかに関する二、三のおもな論点を十分に論じ尽くした。また、神の恵みによって、次の点を簡潔に指摘しておいた。すなわち、御父のことばそのものが神であること、いま存在している万物はその存在をこの方のみこころと力とに支えられていること、御父が創造に秩序を与えるのはこの方を通してであること、この方によって万物は動き、この方を通して万物は存在を受け取ることを。さて、キリストを真実に愛する者、マカリウスよ。私たちの聖なる宗教の信仰において、さらに先に進まなければならない。ことばが人となったこと、神が私たちのあいだに現れたことについても考察しなければならない。その神秘を、ユダヤ人はののしり、ギリシャ人はあざけるが、私たちは崇めている。みことばは、人になられたことにおいて、ごくごく取るに足らない者に見えるので、彼に捧げるあなたの個人的な愛と献身もますます大きくなるだろう。というのも、信じない者たちが彼を侮蔑すればするほど、彼の神性がますます明白になるのは事実だからである。彼らが人には不可能であると除外するものごとに対して、この方ははっきりと可能であることを示す。彼らが不合理であるとあざけるものごとに対して、この方の善が完全に調和させる。知ったかぶりをするこの者たちが「たかが人間ではないか」と笑いぐさにするものごとに対して、この方は本来の御力によって神であることを宣言する。それゆえ、十字架の上でこの方が見せるまったくの貧しさと弱さと思えるものが、偶像の華やかな誇示をひっくり返す。あざける者と信じない者を、静かにまたひそやかに征服して、この方こそが神であることを認識させるように

なるのだ。

さて、これらのことがらを扱うに際してまず必要なのは、すでに言われてきたことを思い起こすことである。あまりにも偉大でいと高くあられる御父のことばが、わざわざ肉体の姿をとって現れた理由を知らなければならない。肉体がご自分の本性にふさわしいものであるとお考えになったからではない。まったく違う。みことばとしてのこの方にはもともと肉体がないのだから。彼が人間の肉体をとって現れた唯一の理由は、御父の愛と善から出ていることだが、私たち人間を救うためである。では、世界の創造と、その造り主である神から始めることにしよう。あなたがまず理解しなければならない事実は次のことだからである。すなわち、ご自身の名を「ことば」という方がはじめに世界を造られ、また彼が新しい創造をもなさったということである。だから創造と救済に矛盾はない。ひとりの御父が両方の働きのために同じ仲介者を立て、世界をはじめに造られた同じ「ことば」を通して世の救いをもたらしたからある。

第二節

宇宙と万物の創造に関してはさまざまな見解があり、おのおのが自分の好みに合う理論を提示してきた。たとえばある人は、万物はひとりでに発生し、いわば行き当たりばったりにできたと言う。エピクロス派の人々はそういう考えを持っている。彼らは宇宙の背後にいかなる「心」もないと言う。この立場は、彼ら自身の存在も含めて、あらゆる経験的な事実にも反する。というのも、万物がある「心」の結果として造られたのではなく、そのように自動的に発生したのなら、確かに存在はしていたとしても、どれものっぺりと同じようでお互いの区別がないはずである。宇宙にあるものは、どれも太陽であったり、どれも月であったりして、何であれ同じであるに違いない。人間の肉体も、全部が手であっ

「試し読み」はここまでです。

お気に入りましたら

ご注文ください。

Penguin Club
www.penguinclub.net